



社会を明るくする運動

犯罪や非行を防止し、
立ち直りを支える
地域のチカラ



豊島公会堂

《社会を明るくする運動とは》

すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない地域社会を築こうとする全国的な運動です。

この運動は、東京・銀座の商店街の有志の方々が非行の予防等を広く訴えるために昭和24年に開催した「銀座フェア」をきっかけとして、昭和26年に始まりました。その後、法務省の主唱により、毎年7月を強調月間として全国で展開され、今回で61回目を迎えます。



「第61回社会を明るくする運動」の行動目標・重点事項

《行動目標》

- ① 犯罪や非行をした人たちの立ち直りを支えよう
- ② 犯罪や非行に陥らないよう地域社会で支えよう
- ③ これらの点について、地域社会の理解が得られるよう協力しよう

《重点事項》

- 「立ち直りを支える取組についての理解促進」
- 「犯罪や非行をした人たちの就労・住居等の生活基盤づくり」

中央大会「区民のつどい」次第

第一部 セレモニー

作文コンテスト表彰式
作文コンテスト推進委員長賞・
常任委員長賞作品発表
ダイナミツ・ウイングスの演奏

第二部 チャリティーコンサート

高南ジュニアバンドの演奏
混声合唱団みみずくのコーラス
西池袋中学校吹奏楽部の演奏
ストーンヴォイス・待夢のコーラス

7月24日(日)に中央大会『区民のつどい』を開催しました。

豊島区では、社会を明るくする運動の趣旨を広くPRするために、毎年強調月間の7月に中央大会『区民のつどい』を開催しています。第61回を迎える今年は、東日本大震災からの復興を応援しよ

うという思いを含め第2部をチャリティーコンサートとして、多くの方をお招きし、吹奏楽あり、コーラスあり、バンドありと、いろいろな形の音楽を楽しみました。

第 1 部

今年度も『命』を題材として、作文コンテストを実施し、中央大会では受賞作品の表彰式並びに作品発表を行いました。

今年度は、東日本大震災をテーマにした作品が多く、震災を通して「生きている」ことを改めて実感し、命の大切さを学んだようでした。発表では、緊張から声を詰まらせる場面もありましたが、発表後の大きな拍手

に励まされ、皆さん堂々と発表を行っていました。

子どもたちが「いのち」について真剣に考えている姿は、聞いている大人の心をつかみ、会場全体が一つになっていました。

そして感動の後のダイナミツ・ウイングスのバンド演奏は、パワフルでポップなリズムに乗せ、加山雄三の曲や「上を向いて歩こう」など復興を応援する曲を演奏し、会場を盛り上げていました。

第 2 部

高南ジュニアバンド(高南小学校)の演奏で始まる第2部は、「宇宙戦艦ヤマト」の力強い演奏でスタート。これから始まるチャリティーコンサートを勢いづけてくれました。子どもたちのひたむきな一所懸命さは、見ている人の心を和ませてくれました。

混声合唱団みみずくのコーラスは、「わらべうた」や「ふるさと」などの古き良き歌が多く、観客に懐かしい日々を思い起こさせるようなひとときをつくり出してくれました。

西池袋中学校吹奏楽部の演奏では、AKB48の「ヘビーローテーション」やいきものがかりの「ありがとう」といった流行りの曲もあり、テンポの速いリズムで、会場の雰囲気をもっと明るくしてくれました。

ストーンヴォイス・待夢のコーラスは、「ちいさな愛とおおきな夢」というテーマを掲げ、そのテーマに合わせた曲を歌ってくれました。感情表現豊かにうたう様子はまるでミュージカルを見ているかのようでした。

チャリティーコンサートという趣旨に賛同して、多くの出演者に参加していただきました。子どもから大人まで、今流行りの曲から古き良き時代の歌まで、そして復興を応援しようという気持ちを込めた曲など、実に多くの方が楽しめて、『みんなで日本を元気にしよう』という気持ちにあふれた一日でした。

また、暑い中集まっていたいただいた観客の方からも多くの募金をいただきました。一人ひとりの協力のもと、中央大会「区民のつどい」は無事幕を閉じることができました。

社会を明るくする運動にご協力頂いている個人・団体 (50音順)

(寄付金)

株式会社 アール・エス・シー
株式会社 サンシャインシティ
株式会社 藤久不動産
株式会社 東武百貨店池袋店
宗教法人 高岩寺
宗教法人 西福寺
宗教法人 祥雲寺
宗教法人 眞性寺
栄鴨庚申堂奉賛会
藤久地所管理株式会社
東京商工会議所豊島支部
豊島区商店街連合会
豊島区町会連合会
豊島西ライオンズクラブ
ピー・エム・ワーク藤和
鈴木 綾子 様

(寄 贈)

株式会社 伊藤園
栄鴨信用金庫
東京信用金庫
東京都薬物乱用防止推進豊島地区協議会

推進委員長賞

生かされた命に感謝して

長崎小学校 6年生
谷川 結理

3月11日。巨大な地震が日本を襲いました。東日本大震災です。私は連日流れるニュースを見て「死」というものがごく身近にあることを実感しました。

私には大切な家族がいます。でも震源地の近くで被災してしまった子供の中にはもう家族と会えない子もいます。私は何か心配なことや嫌なことがあったら、家族と相談したりすることができます。でも、もうすることもできない子供達がいると思うと、とてもつらい気持ちになりました。

この地震で命を失った人も沢山います。ある日、全校朝会の校長先生のお話で、津波で瓦礫となった家の前で必ず家族が帰ってくると信じ、何日も待ち続けている少女がいるという話を聞きました。家に帰ってもしも自分がその少女だったら…と考えると、あることに気がつきました。それは、今生きていることが奇跡だということです。毎日学校に行き、思いっきり遊んで、帰る家があって、ご飯を食べて、家族と話をして…。私はそれがあたりまえのことだと思っていました。でも違うのです。地球にとってはほんの小さなことでも私達の生活を一変させてしまいます。それを乗り越えて今を生きているこの命が本当に尊いものだと思えました。

福島第一原発で冷却作業を行うため、消防員が派遣されることになりました。隊長さんの奥さんは最初は止めたものの、その人の誠意に負けて最後は「日本の英雄になって下さい。」と言ったそうです。私はこの話を聞いた時、すごいなと思いました。それと同時に、

自分も何かできることをやろうという気持ちが高まりました。でも何をやればいいのかわからなくなってしまいました。こんなに真剣に考える前は、こうしたらいなあとかあしたらしいなあとという案が浮かんでいたのにいざ実行するとなるとそれは本当に被災地の人のためになるのかと思ってしまって何もできませんでした。そこで母に相談してみると母は「そんなに深く考えなくてもいいんだよ。そういう心づかいが大切なんだから。」と言いました。私はなるほどと思いました。私が被災地の人だったらやっぱり何かしようという心が一番うれしいと思ったからです。

私は、被災された方々には大変申し訳ない話にはなりますが、今回の震災を経験して一時一瞬がとても貴重で、大切な時間だと気づくことができました。だからどんなにさみしくて、もう何もやりたくないという投げやりな気持ちでも前を向いて行こうと思いました。

「死」はいつやってくるかは誰にも分かりません。もしかしたら、楽しい行事を行っている時に、家族とはなれている時にやってくるかもしれません。でもその中で生かされた命に感謝し、せいじっぱい生きていこうと思います。



作文コンテスト 中学生の部 受賞者

千川中学校 3年生
鈴木 寿奈

をやめて、彼女の中学校だけに通うようになったと聞いていましたが、ひょっとしたらそれは、最期に少しでも多くの思い出を作りたいからなのかもしれません。クラブにも、バスケットボールをやって持てるような身体で参加し、毎日私に話しかけてきて、その日の最後には決まって「ありがと。」と言っていました。まるで明日から会えなくなるかのよう。

彼女は、亡なる3週間前、私の誕生日にキーホルダーをプレゼントしてくれました。私に、最初で最後の宝物をくれたのです。

私は、今でも彼女のことを思い出します。特に彼女が本当に中学校を卒業したがっていたことを思い出した時に、せめてあと1年と少し時間があればよかったのに、と思えてなりません。私たちは、中学校を卒業することが、卒業できることが当たり前だと感じていました。実際私も、これまでそういう感じでしたが、私と同年代の中学生たちもそんな風に考えていると思います。

しかし、卒業したくてもできない人が、卒業したくてしたくて、それでもできなかった人が私の友達にいました。そのことを思うたび、私は学校に通えている毎日が、とても恵まれていることだと感じます。もちろん日々の生活に不満がないわけではないですが、普通に生活できていること、それ自体が私にとっては、本当に大切なことです。

世の中には、普通の生活に飽きて、刺激を求めて非行に走ったり、犯罪に手を出したりする若者もいます。その中には、自分の身体を傷つけたりする人もいて、まるでそれがかっこいいことでもあるかのように考えていますが、その人たちにもう一度、自分が生きているということが、普通の生活を送れることが、どれほど幸せなことかを考えてほしいと思います。

常任委員長賞

正しい知識と優しくて強い心を

長崎小学校 6年生
関 綸太郎

東日本大震災のニュースの中で、福島県から避難してきた小学生が避難先で「放射能がうつる」と言われ避けられたりするケースがある、という記事を読みました。ぼくは、その記事を読み、とてもとても腹立たしい気持ちになりました。福島第一原子力発電所からの放射能漏れは、東京でも空気中や水道水の放射能の量を気にするほど大きな問題です。避難してきた小学生は、その原発のそばに住んでいてとても怖い思いをしてきたと思います。それに、避難生活では、不便な思いや、友達と離れさみしい思いをしていると思います。それなのに、傷つけるような言葉をいったり避けたりするなんて、ひどいと思いました。

放射能は、インフルエンザのようなうつるものとはまったく違います。また、避難している方々は、人に影響がでるほどの放射能を浴びることのないように予防のために避難しています。だから「放射能はうつる」は事実ではありません。それなのに、なぜ、こんなことになるのか考えてみました。

原因の1つは、正しい知識を持っていないことにあります。正しい知識を持っていないために、放射能は危険なもので、その近くから来た人も危険だと思ってしまう、避けようとする行動をとってしまうのだと思います。特に、ぼくたち子供は、大人が危険だと話していると、それを信じてしまいます。ニュースで、福島県から避難してくる時は証明書が必要だとか、宿泊施設やレストランで宿泊や入店を拒否されるケースがあるという話を聞いたりすると、なんとなく避け

た方がいいような気持ちになってしまうように思います。それでも、あいまいな情報で人を傷つけるようなことを絶対にしてはいけなと思います。

原因の2つ目は、相手の気持ちを考える心が足りないことにあると思います。なんとなくからかったり、友達のまねをして一緒にやったりしている人もいるかもしれません。でも、言う方は軽い気持ちでも、言われる方はとてもとても悲しい気持ちになるということを考えて、絶対にやめるべきだと思います。また、自分は仲良くなりたいと思っていても、自分まで他の友達から仲間はずれにされてしまうのではないかと思い、一緒にからかってしまう人もいるかもしれません。自分の考えで行動するのはとても勇気が必要ですが、それができることは大切なことだと思います。

この記事について考えているうちに、身近なところでも、わざとではないけれど結果として相手を傷つけてしまっているようなことがあるのかと思いました。

人は、誰もが大切な「一人」だと思います。そんな、「一人」「一人」がお互いを認め、大切にできる社会にするためには、みんなが、たくさんの正しい知識を身につけ、相手の気持ちを思いやることのできる優しい心と、自分の考えで行動できる強い心を持つことがとても大切だと思います。

常任委員長賞

命の重さ

駒込中学校 2年生
佐藤 希海

「のんちゃんはいらない!」「何でも一生懸命することが大切なんだよ、結果よりも過程が大切なんだよ。」というのが口ぐせだった祖父。お習字や工作をよく教えてくれた、いつもニコニコしていた“おじいちゃん”が去年の12月16日にこの世を去った。11月からカゼをひき、大事をとって入院するとしか聞いていなかったのに、私にとって12月16日は晴天の霹靂だった。

ニュースで殺人や自殺を報道していても、今まで人の死は私にとって別世界の事としか受けとめてはなかった。それが祖父の死で、改めて人は生まれ死んでいくことを大きな悲しみとともに実感した。

祖父の入院中は、見舞いに行くたびに足のむくみをとるためにみんなでよくマッサージをした。祖父は毎日「ありがと。」と言ってくれた。自分がつらい時でもいつも病院の先生や、看護士さん、周りの人々に心配りをしていたそう。私も葬儀のお別れの時に棺に入れる手紙を書こうと祖父と過ごしてきた日々を思い出すと、祖父は改めて私たちに自分の時間をさいて面倒をみてくれていたことに気付いた。祖父が当然のように私を育ててくれた。私はそのことを忘れていたのだ。私は感謝の気持ちを日々持つべきだったと後悔した。

祖父に教えてもらった“感謝をする心”を忘れずに私は過ごしていった。

今年の3月11日には歴史に残る東日本大震災が起こった。私の小学校の担任だった先生の実家も

被災され、家が流されたと聞き、とても人事だとは思えなかった。たくさんの尊い命が失われ、今に行方不明の方々も大勢いる。本当に肉親を一瞬のうちになくす悲しみは、言葉では言い表わせない程だと思う。ニュースでは、その悲しみや苦しみにたえてひなん所で生活する人々の姿が毎日ニュースで流れる。日本全国、いや世界中からボランティアとして被災地へ向かい津波で流れたり、泥にまみれてしまった家の片付け、整理などを手伝う人々も大勢いると聞いた。私はまだ中学生で現地へ行き実際の手伝いはできないと思うが、何かで役に立てることを自分のできることをしたいと思う。募金、風評に惑わされず野菜を買うこともその1つなのかもしれない。東北の人はがまん強く、奥ゆかしく、自分が被災していても「どうぞお先に!」と相手を敬い、けんそんしてゆずりあう光景が見られる。私も、いや私達も見習っていかねばならない。そして少しでも早く復興して、幸せな日々を送れるようになってほしいと思う。

私たちは“命”というものを軽く見ていたのかもしれない。こうやって殺人や自殺のニュースを見てても何とも思わなかったのは、私が“命”というものを軽くみていたからではないだろうか。今回、私は「祖父の死」そして「東日本大震災」この2つを経験し、生まれ変わったように命について深く考えるようになった。私は、これからこの経験を生かし、人々に対して出来ることを日々考え、過ごしていきたい。同じ“命”を大切に作る人間なのだから。

優秀賞

「力強い命」

高松小学校 5年生
中島 英

わたしのお母さんは、助産師です。「産ものを助ける」で助産師です。命を産むお手伝いをするという責任のある仕事で、いつもいそがしくしています。でもわたしは、お母さんのしている仕事が人のためになっていると思うと、とてもうれしくなります。

わたしは、「命」という言葉を聞くと生まれたての赤ちゃんが、頭にうかびます。命はみんなお母さんから生まれてきます。日本で1年間に生まれてくる命は約100万人だそうです。1日あたりにすると約2,700人の命が生まれてきます。わたしはこの数はとても少ないけれど、一つ一つがかけがえのない命だと思います。なぜなら、一つ一つの命がそれぞれがう命だからです。生まれたての赤ちゃんはだれにも教わらなくても、上手におっぱいをのみます。だっこしてもらうために泣きます。赤ちゃんは、自分で回りながら出てきます。わたしは生まれたての命はとても強いと思います。



作文コンテスト 小学生の部 受賞者

常任委員長賞

明日へと繋ぐ命

千川中学校 3年生
石田 小百合

想していたが、まさか足の踏み場がないまでは全く思いもしなかった。「これでも結構片づけたんだよ」と母が言い、その言葉で益々私は驚くのであった。

祖父の心配もあり、私は真っ先に祖父の所へ電話した。しかし、「現在大変込み合っていますので、まだ後でかけ直してください。」という状況であった。だったらせめて、今の日本はどうなっているのかを知ろうと思い、テレビをつけた。そこには津波によって流される家が映しだされていた。私は一瞬目を疑い、思わずリモコンの電源を切った。試にもう1度電源を入れるのを試みたが、先程と同じ状況が画面に映し出されていたのであった。その映像を見て私は、ショックのあまり言葉を失った。

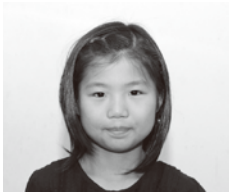
地震で家族を失ってしまう人もいた。1人の子供が必死に、「この人、ご存じではありませんか。」と尋ねているのを新聞の記事で読んだ。私は見つかったと強く強く願った。しかし見つかることはなかったという。この子供はこの先ずっと親がいなくていいのかと思うと、涙がふれだしてくるの分かった。私が困ったり悩んだりすることは、このことに比べればなんてちっぽけなものだろうとも思った。

地震によって、たくさんの命が亡くなってしまった。ストレスで、具合を悪くしてしまう人もいた。どれもこれも、暗い気持ちになることばかりだ。しかし、心が救われることもあった。それは、そのような人々たちを励まそうとする日本人の姿である。ボランティアとして歌を歌って励まそうとする人や、笑いをもたらす元気にする人、おじいちゃん、おばあちゃんを揉む子供もいた。この場面を見たら、みんなめげずに、地震になんか負けないという前向きな気持ちになると思う。そして私は、地震によって命の大切さをより実感することができた。なぜなら地震によって亡くなってしまった方々が、今を精いっぱい生きてと訴えている気がするからだ。

私はこの先、困難に出会うこともあると思う。しかしその時はこの震災のことを思い出し、「負けてたまるものか。」という思いで立ち向かって生きていこうと思っている。それが、亡くなってしまった人たちに見せることのできる自分だと思ふからだ。私は絶対に負けない。

優秀賞

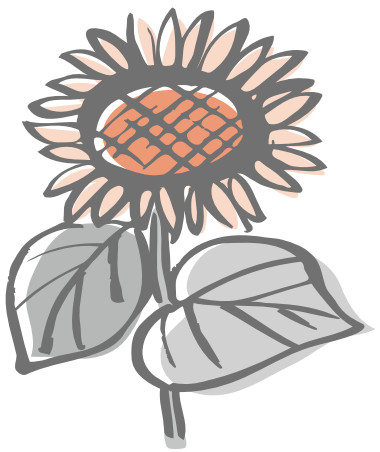
社会を明るくする運動

高松小学校 5年生
かねばやし はる き
金林 春希

わたしは、バスや電車に乗っている時に、ゆう先席におとしよりではなく、わかい人がすわっているところをたまに見かけます。おとしよりが立っていなければまだいいのですがその時は、おとしよりが立っていました。なのにわかい人はおばあさんが立っていることに気がつきません。そうすると、ゆう先席にはすわっていない女の人がおばあさんに席をゆずってあげていました。するとおばあさんはうれしそうな顔をして「あら、ありがとうね。」と、喜んでいました。それを見てわたしは、自分もあんな風になりたいと思いました。

それから、すこしたってわたしはバスのゆう先席にすわってしまいました。その時は席はゆう先席しか空いていなく、とてもつかれていたのとおとしよりが来たら立ってあげようと思っていました。すると次の駅でおとしよりがバスに乗ってきてしまいました。そしておばあさんはきょうきょう席を見まわして空いている席をさがしていました。しかし、席は空いていません。なので、わたしは席をゆずってあげようと思いましたが、はずかしくてなかなかゆずってあげられません。とうとうあと3駅でおりてしまいます。やっとおばあさんに「どうぞ」と言って席をゆずってあげられました。するとおばあさんは喜んでくれました。とってもうれしかったです。はじめはとてもはずかしかっただけと言ってみるとかんたんでした。それに言ったあとは心がすっきりします。

これからはおとしよりだけでなく、おなか
に赤ちゃんがいる人や、小さな子どもをつ
れている人などにも席をゆずってあげたい
です。そしてゆう先席ではない席でもゆず
ってあげたいです。席をだれかがゆずると、
ゆずってあげた人もゆずってもらった人も心
がすっきりしたりうれしくなったりしてみんな
が幸せになれるのでみんなが席をゆずって
みんなが幸せになったらいいと思います。



優秀賞

思い出をくれた命

椎名町小学校 5年生
あか お ひ な こ
赤尾 日向子

私は、命について考えました。そして1番最初に思い出したことが以前かっていた鳥のことです。

ある日私はお母さんとペットショップに行つてセキセイインコをかってもらいました。初めてのペットだったのですごくドキドキしました。名前を決めるのにいっぱい時間をかけてその結果「ピッピ」にしました。その時の気持ちは、ドキドキからワクワクにかわっていました。

ピッピが私の家に来てから毎日がとても楽しくなりました。ごはんをあげたり、いっしょに遊んだり。ピッピは、いたずらだったので頭の上に乗ったり、やさしくほっぺをついばんだりしていました。私とお母さんとピッピにいっぱい言葉を教えたこともよく覚えています。まず「ピッピ」としゃべってほしかったので、それを最初に覚えさせました。そしてついに「ピッピ」と話してくれた時は、お母さんと大喜びしました。びっくりしたことは、いつも家族でしゃべっていることをピッピが覚えてしまったことです。なのでどんどんピッピがいろいろなことを話すのでついには、何を言っているのか分からずもごもごしゃべっていました。だから家族で笑っていました。

ピッピは1度病気になってしまったことがあります。ピッピが病気だとも知らず、鳥の病院に健康診断をしに行きました。すると、先生に病気と言われてすごくおどろきました。薬を買って家に帰りました。病気は、治ったのですごく安心しました。その時私は、「これからもしっかりピッピを守ろう。」と心からそう思いました。それから何事も無く、楽しく生活しました。

ピッピが私の家に来てから4年がたちました。そしてある夜、私がいつものようにピアノをひいているとお母さんがすごく大きな声で「ピッピ」と言っていたので急いでお母さんの所へ行くとピッピをだいているお母さんがいました。ピッピは鳥かごについているぼうからおちてしまったのです。そして少しするとピッピは、天国へ行ってしまうしました。頭の中が真っ白になりました。お母さんと私はいっぱい泣きました。お父さんが急いで帰ってきたのでピッピは、お庭にうめました。私は、ピッピに数えきれないくらいありがとうと大好きを言いました。

次の日、私は自分をせめ続けました。でもピッピが天国に行ってしまったことを知っている友達がいっぱいなぐさめてくれました。なので元気になりました。

私はたまに空を見上げます。「ずっと、大好き」言いながら、小さいピッピが大きな思い出をくれたことをすごくかんしゃしています。

優秀賞

「言葉」が持つ力

西池袋中学校 2年生
しまだ いづみ
島田 いづみ

私が、明るい社会にするために毎日している事は、朝1番のあいさつです。朝起きたら、最初に台所に行つて、お母さんに「お母さん、おはよう。」と、元気に気持ちのいいあいさつをします。お母さんも、「おはよう。」と、笑顔で言ってくれます。おじいちゃんや、おばあちゃんにも、「おはよう。」とあいさつします。それから私は、玄関そうじをします。いつもその時間に、新聞屋さんにも、「おはようございます。ご苦勞様。」と、声をかけています。そして、新聞屋さんも「おはよう。手伝いえらいなあ。」と、言ってバイクで帰ります。その時の新聞屋さんの顔は、にこにこしています。夜仕事から帰って来る、お母さんとおじいちゃんにも、元気なあいさつをします。私が、学校に行く時も、「行ってきまーす。」と言います。家の人は必ず、「行ってらっしゃい。気を付けてね。」と、何度も何度も、気を付けてを繰り返して言います。

通学路で会う人にも、元気にあいさつをしています。近所のお兄さんや、お店のおばちゃんにも、「おはようございます。」とあいさつをすると、「おはよう。」と明るい笑顔であいさつを返してくれるので、とてもうれしいです。学校に着いてからも、先生や友達に忘れずにあいさつをします。あいさつをしても、知らんぷりをする人がいると、悲しくなります。なんでだろうと、いろいろ考えてしまいます。その時の自分は、きっと悲しい顔になっていると思います。1日を明るく過ごすためには、朝のあいさつが大切だと聞いた事があります。だから私は、明るくて元気なあいさつを、いつも心がけています。

社会を明るくするために、私が思う事は思いやりの心を持つ事です。私は、困っている人やお年よりの人に、出来る限り親切にしてあげたいと思います。小学校低学年の時に、近所のおばあちゃんが大変そうに荷物を持っていたので、走って行って持ってあげた事があり、今でも忘れません。しばらくたってからお母さんに、「いづみ、お年よりに親切にしてあげたのね。喜んでたよ。お母さんも、うれしいよ。」と、話してくれました。私も、いい事をして本当に良かったなあと思いました。みんなが、声をかけあって思いやりの気持ちを持てば、きっと今よりも明るい社会になると思います。

それから、家族や友達と、たくさん会話をするといいと思いました。悩みや相談したい事を、聞いてもらったり聞いてあげたりして、いつも明るく過ごせるといいと思います。私は、悩みを相談出来なくて学校でしょんぼりしていました。その様子を見て、私を心配してくれた友達が居ました。友達は、私のために相談してくれていました。そして、先生から心配してくれている友達が居ると聞いてとてもうれしかったです。だから、思っている事や伝えたい事があったら、どんどん話すといいと思います。会話は、大切だと思いました。社会を明るくするために、私は話す事から、実行したいと思います。

優秀賞

「できることから始めよう!」

千登世橋中学校 1年生
たかもと き な こ
鷹本 喜奈子

私は最近スーパーなどで、募金箱を見かけます。その箱には外国人の写真がはってあります。その写真に写っている外国人の表情が、とても苦しそうでした。募金内容は外国の貧しい国でくらししている子どもたちに医りょう器具やワクチンを届けるユニセフ募金でした。私はお釣りの10円をいれました。私は家に帰りよく考えました。日本だけでも人口は約1億人以上います。1人10円の計算をすると10億円とすごい額になります。1人10円は無理だとしても1億円以上には必ずなる計算です。「たった」といったらだめですが、私から見た10円はたったです。そう、たったの10円で助かる命ならば絶対に募金した方がよいと思い、こんどからはお釣りが例え1円であっても募金することにしました。ある時、募金箱の中に1,000円がはいっていました。なんだかジーンとしました。私と同じ考えの人がいる!うれしい!という気持ちでいっぱいになりました。

私の小学校では体が不自由な人のために、募金活動をたまにやっていました。私はそれがあたんび100円をいれました。いれると、緑か赤のはねがもらえます。私はそれを命の羽根といい、校帽につけてました。今はもう中学生なので校帽はかぶりませんがまだ命の羽根は私の貯金箱にはってあります。なぜなら机からすぐに見える所だからそれを見ているととても優しい気持ちになれるのでまだ、命の羽根は今でもあります。

4月、入学式。千登中にオールメルというものがあると知り、先ばいにきくと、体の不自由な人のためと聞いたのでいつやるか、ワクワクしています。やる時はなるべく協力的に取り組みたいです。

私がこういう考え方をしたのは募金箱もありますがもうひとつ理由があります。

私は小学4年生の時に手術を受けました。その時の病気はじんぞうの病気でした。私は小さいころから尿が少しずつ出ず、たまに尿が出したいのに出せなくなり高熱がでたので病院にいくと、ぼうこうえんといわれました。ぼうこうえんとは、トイレに行きたいけどガマンをしてしまつて、じんぞうに負担がかかり、尿を出せなくなってしまう病気です。でも、まだ小さかった私はガマンをしました。するとまた高熱がでて、尿も出なくなりましたのでこんどは大きい病院に、行きました。すると、正式名しうは分かりませんが、生まれつき、ふつう右と左のじんぞうに1本ずつあるはずの尿管が左に、2本あり、2本のうちの1本は正常。もう1本がすっごく太くてその1本から尿が逆流してしまい、高熱がでる。そういう病気でした。手術を受けるなんて信じられないし、こわかったです。それでも病院の看護師さんが、「大丈夫。こわくないよ。」とはげましてくれ、ぶじに手術は終わり、たいいんもできました。あの時、看護師さんが一言、声をかけてくださらなかったら私は安心して手術にのぞめなかったと思います。人の言葉ってすごいなあ。とあらためて実感しました。そして私はあの時の看護師さんのような看護師になりたいです。そして貧しい国やつらい病気である人々を1人でもお助けしたい。救いたいと思います。これがもうひとつの理由です。優しい気持ちは人を優しくする。私は今でもあの看護士さんに感謝しています。

ユニセフ募金と私。これからもユニセフ募金になるべく協力し、日本だけではなく、世界の人々が幸せに、安心してくらせる日が1日でもはやく来ればいいと思っています。日本中の人々が少しでもそういう気持ちを忘れずに、優しい気持ちをもって世界に協力できたらいいと願っています。1歩でもいいので前へ前へ進める、そんな日本、世界にしていきたいです。